

平成 30 年 1 月 24 日 (水)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさん WS 扇の文化

1,4 回目のご来館

マクミランさん 4 回目のご来館では、前回に引き続き卷子本『阿不幾集』(図 1)¹ と屏風『扇の草紙』(図 2)²、さらに版本などの扇の草紙³をご覧いただき、小山順子先生(当館准教授)と恋田知子先生(当館助教)からレクチャーがありました。

図 1



図 2



1 請求記号 99-73

2 請求記号 99-151

3 扇の枠の中に絵が描かれ、その周囲に和歌に関連する和歌が配さ

2, 和歌と絵画の織り成す世界

そもそも扇とは、単に風を送るための道具ではありません。扇に和歌を書き付けて贈り合ったり、左右に分かれて扇を出し合いその優劣を競う「扇合せ」というゲームがあったり、古くから日本文化のなかで親しまれてきたものでした。

恋田先生は、『花鳥風月』⁴という奈良絵本のなかで貴族達が扇合せを楽しむ様子(図 3)を示し、このような文化から「扇の草紙」が生まれてきたと説明してくださいました。

図 3



「扇の草紙」は和歌と絵画で成り立っており、中には謎解きを楽しむものもあります。「鶺鴒^{かきぎ}のわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」という有名な大伴家持の歌とセットになっているの

れた形態の作品群。様々なメディア(卷子本、冊子、画帖、屏風など)に描かれる。前回の来館時に登場(H29/12/20)。

⁴ 99-146-1~2 (貴重書)

平成 30 年 1 月 24 日 (水)

は、傘と鷺がなぜか橋の上に立っている絵が描かれた扇です (図 4 『阿不幾集』)。「かさ」と「さぎ」で「かささぎ」……思わず笑ってしまうような言葉遊びもあるのですね。

また、松の木の下で男性が琴を演奏している図柄の扇があります (図 5 『阿不幾集』)。この扇に添えられた歌は「琴の音に峰の松風かよふらし いづれの折より調べ初めけん」。小山先生によると、松が風に吹かれて立てる音「松風」と琴の音が似通っているという中国の発想が日本にも影響を与えており、ここでは松風と琴が合奏しているようだと言っているのだそう。これを聞いたマクミラン氏は、「西洋では自然の音と人工的な音とは全く別と考えるので、それが同質のものであるという発想はないのです」と教えてくださいました。

図 4



図 5



⁵ 『The Tales of Ise』 (文春文庫、2016)、『英語で読む百人一首』

3, イベントの企画、今後の展望

3 月に開催することが決定している鳴子町でのトークイベントには、マクミランさんにご登壇いただきます。そこでは卷子本『阿不幾集』と屏風『扇の草紙』の中から、特に『伊勢物語』と『百人一首』を題材にした絵と和歌を選び、それらについて話をさせていただこうということになりました。

和歌の世界を絵として描くとき、解釈がはっきりと出るようになります。マクミランさんは既に『伊勢物語』と『百人一首』の英語訳を行っておられ⁵、解釈で悩まれた経験をお持ちですので、是非、解釈の選択という大きな問題についても語っていただきたいと思えます。

他にも、『阿不幾集』をただ翻訳して活字にするだけではなく、扇形の本にできないか (なんと夢の中でその本をご覧になったとか!)、扇に和歌を書き付ける風習を活かして、扇の形のメッセージカードが作れないか、と、マクミランさんからも教員サイドからもたくさんのアイデアが出てきました。



(文春文庫、2017)